

『鷲林拾葉鈔』記事対照表（一）

—— 中世における『法華経』談義書の位相 ——

渡辺 麻里子

中世の談義所において、談義⁽¹⁾という形で盛んに学問の研鑽が行われた。師である能化が講義した内容は、受講者である所化によって筆録された。それを照合・加筆して整え、さらに引用を加えて潤文し、「談」という書となったとされる。⁽²⁾ こうした談義の書は諸寺等に多く残されており、学僧たちが何のどのような事項について学び、何が議論されていたのかを知る手がかりとなる。談義は、天台・真言・浄土など諸宗で行われ、例えば、天台宗においては、『法華経』、『法華経文句』・『法華経玄義』などの他、義科・問要など様々な対象がある。稿者は、談義の中心となる『法華経』と『文句』・『玄義』の注釈に注目し、特に關東天台の談義所における学問の様相を明らかにしたいと考えている。

【法華経】の談義の書（以下「談義書」と称す⁽³⁾）として、これまでの研究において多くの書が紹介され

てきた。しかしこれら一群の書は「直談抄」の名のもとにひとくくりになされ、個別に検証されることは少なかった。一つ書きの形式をとること、問答の形式を伴うこと、諸書の引用を多く用いること、引用の諸書に物語や和歌を多く含むことなど、同様の形式を持つことから「直談物」と総括されてきたのである。従って、個々の書の特徴が精査されることはあまりなく、「同様」とはどれ程のものなのか、あまり論じられてこなかった。理由としては、「鷲林拾葉鈔」など、テキストが大部であること、記事が煩雑で個別の比較がしにくいことなどがあげられよう。影印で原本や写本が出版され、本文が入手しやすくなった現在でも、全体を通じた論は充分になされているとはいえない。稿者は以前、「轍塵抄」を中心にして、「鷲林拾葉鈔」と「法華経直談抄」との比較を行い、これら同種とみなされてきた書の間にも、様々な位相があることを提示した。まだほんの一端を示しただけに過ぎず、今後、個々のテキストについて、一層の検討が必要である。そこで、まず手始めに、「法華経」談義書の諸書に収められる各記事の異同を比較・検討する作業を試みたいと思う。所収される記事が、どれ程共通しどれ程相違するのを一覧できるように、「鷲林拾葉鈔」を軸に、「一乗拾玉抄」・「轍塵抄」・「法華経直談抄」との、記事の対照表を作成してみることとする。

【鷲林拾葉鈔】は、尊舜が「法華経」を談義した書である。尊舜は、宝徳三年(1451)年生、永正十一年(1514)に六十四歳で没している。常陸国那珂郡友部の出身で、常陸国中郡月山寺(現・茨城県西茨城郡岩瀬町)で尊叡に師事した。若くより秀逸で、十二歳の時には、宗論の席で真言の古老の口を封じた、との逸話もある。学問に励み、顕密の奥蔵に徹した。学徒の要請に応じて三大部の大綱を講じている。また、津金寺(現・長野県北佐久郡立科町)においては、「津金寺名目」をなすなど、百四十巻を越える、多

くの重要な著書を残している。永正六年には、叡山で登壇できない座主にかわり、受戒和上の代役を勤めている。叡山においても、声望厚く、学識が認められていた証左であろう。晩年は黒子の千妙寺（現・茨城県真壁郡関城町）に住し、名を亮尊と改めている。関東天台教学の中核を担う尊舜に師事するべく、月山寺には多くの学僧が集まった。『鷲林拾葉鈔』は、永正九年（1512）、晩年に近い、六十二歳の時のものである。尊舜の学問の集大成であり、『法華経直談抄』など、後世の談義書に大きな影響を与え、慶安三年（1650）には版行もされている。記事が充実していて分量も多いこの『鷲林拾葉鈔』を基軸として、他書との比較を行うこととする。⁽⁸⁾

比較対照する書として、同様の『法華経』の談義の書のうち、三点を取り上げることとした。第一の『一乗拾玉抄』は、『鷲林拾葉鈔』に先行して、長享二年（1488）に周防国氷上山興隆寺の住僧叡海によってなされたものである。尊舜の師である尊栄と共に、叡山で学んだ幸海が、『一乗拾玉抄』の書写に関わっており、尊舜が『一乗拾玉抄』を見ている可能性が指摘されている。⁽⁹⁾

第二の『轍塵抄』は、大永六年（1526）に、武蔵国仙波北院十四世実海によってなされた。実海は、『鷲林拾葉鈔』の序を記し、賛辞をおくっている。また、実海の師である隆海の談義を尊舜が書写したり、⁽¹⁰⁾尊舜の『摩訶止観見聞添注』に『実海云』の文言が見えるなど、⁽¹¹⁾両者には、緊密な関係がうかがえる。『鷲林拾葉鈔』の序に、長年、今の世に仏の教えを伝えるため『法華経』の注釈書を書き記そうとしてきたが、『鷲林拾葉鈔』を友人尊舜に見せられ、あまりのすばらしさに自分のすべきことはなくなり筆を置いた、と実海は述べている。しかし、その十四年後に、改めて自ら『轍塵抄』をなしているのである。『鷲林拾葉鈔』

に贅辞を述べつつ、後に同様の『法華経』の談義書をなしているということには、それ相応の思いがあるはずである。『鷲林拾葉鈔』を念頭におきつつ、それとは異なるどのような談義書を目指したのか、その意識のありようは重要であろう。稿者は、以前『轍塵抄』と『鷲林拾葉鈔』の比較を行い、『轍塵抄』と『鷲林拾葉鈔』の典拠に対する姿勢の違いについて少しく述べた。また、「尋云……答云……」という問答の部分にまで、全く等しい文が所収されるなど、その共通性も指摘した^{〔12〕}。著者同士の関わりと同時に、テキスト自体の関係性も十分検討される必要がある。

第三の『法華経直談抄』は、柏原成菩提院（現・滋賀県坂田郡山東町）の末寺である菅生寺に住する栄心が編纂し、成菩提院に寄進したものである。成立の年次は不明であるが、栄心が天文十五年（1546）に没していることから、それ以前の成立となる。項目の立て方が『鷲林拾葉鈔』を模したようであるため、早くから『鷲林拾葉鈔』の影響が指摘されている^{〔13〕}。しかし、細部を検討していくと、『法華経直談抄』は、『鷲林拾葉鈔』を規範にしているものの、独自の文脈で編成し直していたり、『鷲林拾葉鈔』にない記事を採用していたりするなど、異なる意識で編まれている点も多く見受けられる。従来似たタイプの『法華経』談義書として、簡単にまとめられてきたが、詳しく比較検討していく中で、その位相が明らかになるはずである。

対照表を一見して気づくのは、「同様な」点ではなく、相違点である。一つ書きの条目は、共通しておらず、条目自体に異同があることがわかる。例を挙げると、（一）で『法華経』の意義を説く際に、「一乗拾玉抄」・『轍塵抄』・『法華経直談抄』は、釈迦のこととして、悉達太子の出自・出家・得道を述べるのに対

して、「鷲林拾葉鈔」は説かない。(3) 直談・訓読不同事では、「鷲林拾葉鈔」・「一乗拾玉抄」・「法華經直談抄」が直談とは何かを述べるのに対し、「轍塵抄」では触れない。こうした著名で、特異ではない記事でも、採用・不採用に異同があるのである。また、各記事を見ていくと、その異同がわかる。同じ条目を持つていてもその主旨は異なり、主旨が重なる場合でも、引用している説が異なるのである。諸説の典拠の差異は、著者の学問の背景や姿勢を知る上で重要である。典拠を示していないものについては、その出所が不明なものが多く、説明が求められる。情報源を辿ることができれば、著者(談義の主体)の学問形成のあり方を解明する手がかりとなるだろう。

本稿は、序品の冒頭の一部を対照したに過ぎないが、全体に渡った対照を順次行っていきたいと考えている。また対照表は、四つのテキストに絞っているが、検討すべき「法華經」談義書は数多くあることは言うまでもない。この対照表が、他の「法華經」談義書を考える端緒になればと思う。

[注]

(1) 本稿で「談義」という場合、「講義する」意として用いている。「直談」も「講義する」意として用いられることがあるが、「直談」という語には、広義・狭義の意があり問題を多く含むため、「談義」を用いることとする。「直談」の語義については、稿者は天台宗教学大会(二〇〇〇年十一月)にて、口頭発表を行った。

これについては別稿を用意している。

(2) 尾上寛仲「談義所と天台教学の流伝」(「叡山学報」二二号 一九六一年一〇月)で、「止観義例私」下巻奥書に注目し、談義の書の形成について述べている。

(3) 註(1)にも関わるが、「直談」の語は問題を含むため、総称としての「直談抄」という語は用いず、「談義」の書ということで「談義書」と称しておくこととする。

(4) (5)へ直談抄へ直談物」という語は、廣田哲通の一連の論考による。「中世法華経注釈史の研究」(笠間書院 一九九三年)、「天台談所で法華経を読む」(翰林書房 一九九七年二月)、「中世仏教文学の研究」(和泉書院 二〇〇〇年九月)において、直談系の法華経注釈書の代表的なものとして、「鷲林拾葉抄」・「轍塵抄」・「法華経直談抄」・「一乗拾玉抄」などを挙げている。

(6) 「鷲林拾葉抄」は、慶安三年刊の版本が「法華経鷲林拾葉抄」(臨川書店 一九九一年)、「一乗拾玉抄」は叡山文庫天海蔵写本の影印が、「一乗拾玉抄の研究」(中野真麻理著 臨川書店 一九九八年)、「法華経直談抄」は、寛永十二年(1635)刊の版本が「法華経直談抄」(臨川書店 一九七九年)、写本は、叡山文庫金台院蔵本・妙法院蔵本・疎竹文庫蔵本が「法華経直談抄 古写本集成」(臨川書店 一九八九年)にある。

(7) 拙稿「法華経注釈書の位相——「轍塵抄」の「訓読之志」を端緒として——」(「仏教文学」二四号 二〇〇〇年三月)

(8) 尊舜については、永井義憲「鷲林拾葉抄」——その撰者と文学——」(「法華経鷲林拾葉抄」 臨川書店 一九九一年)に詳しい。

(9) 中野真麻理「一乘拾玉抄の研究」(臨川書店 一九九八年)

(10) 叡山文庫生源寺藏「問要賢林」の奥書に、「右之御本者、山門阿弥陀坊之隆海法印、正観院之慶運法印、明静院之賢慶法印、此三人題者也。御談ヲ関東尊舜住山之時、聞書訖。以上廿六ヶ條畢。」とある。

(11) 廣田哲通「中世法華經注釈書の研究」(笠間書院 一九九三年)に指摘がある。

(12) 前掲拙稿、註(5)

(13) 池山一切圓「法華經直談鈔」解題」(臨川書店 一九七九年)

* 「鷲林拾葉鈔」、並びにテキストの比較については、「直談の会」の成果に多くを依っており、会員諸氏には多くのご教示をいただいている。ここに謝意を表したい。

〈凡例〉

一、記事対照（序品）に使用したテキストは以下の通りである。

『鷲林拾葉鈔』

……日光山輪王寺天海藏写本

・参照、蓬左文庫藏写本 慶安三年刊、版本（『法華經鷲林拾葉鈔』臨川書店 一九九一年）

『一乗拾玉抄』

……叡山文庫天海藏写本

・影印、中野真麻理『一乗拾玉抄の研究』（臨川書店 一九九八年）

・翻刻、中野真麻理「叡山文庫天海藏『一乗拾玉抄』（巻一）翻刻」（『国文学研究資料館紀要』二五号 一九九九年三月）

『轍塵抄』

……日光山輪王寺天海藏写本（八本）（永祿四年（1561）舜雄写、七冊本）

・参照、高野山凶書館三宝院寄託写本、書写年次不明、延深とあり。

『法華經直談鈔』

……叡山文庫金台院藏写本（『法華經直談鈔 古写本集成』臨川書店 一九八九年）

・参照、寛永十二年（1635）刊、版本（『法華經直談鈔』臨川書店 一九七九年）

一、テキストの配列は上より、『鷲林拾葉鈔』、『一乗拾玉抄』、『轍塵抄』、『法華經直談鈔』である。『一乗拾玉抄』の成立は、『鷲林拾葉鈔』より先行するが、『鷲林拾葉鈔』を軸にするため、『鷲林拾葉鈔』の下端に据えている。

一、一段め、「鷲林拾葉鈔」の見出しは、日光山輪王寺天海藏写本の一つ書きの項目で、「1」「2」「3」として通し番号をつけた。また参考として、版本の見出し（巻頭ごとの目次による）を添えた。

一、二段め、「鷲林拾葉鈔」の記事は、見出しの一つ書きごとに、さらに記事を細目に分け、それぞれ出現順にABC……と記事に通し番号をつけ、記事の内容の大略を示した。また、第二十八番以降はアイウ……で示した。記事の内容は、逐語訳を目指した。テキスト間の比較の都合上、なるべく簡略にしないようにした。

一、本文における引用について、例えば「記三云……」の場合は、「記三に云うことには、」とせずに「記三」と略している。

一、三段め「一乗拾玉抄」以下については、記事内容が「鷲林拾葉鈔」の記事に大略同じである場合は、「鷲林拾葉鈔」の記事符号ABCを以て示した。

一、記事内容が、「鷲林拾葉鈔」の記事に大略同じでありながら、内容にいくらかの差異・特徴を有するものは、「鷲林拾葉鈔」の記事のバリエーションと見なし、「鷲林拾葉鈔」の記事記号ABCに対応してA₁B₁C₁等の記号を用いて出現順に示し、異なる内容を簡略に示した。

一、「鷲林拾葉鈔」にない記事については、出現順にabcの記号を付して示した。以降の段でその記事のバリエーションと見なせる記事には、前項と同様にa₁b₁c₁の記号を付した。

一、「鷲林拾葉鈔」に対応する記事が、外の一つ書きの項目の中にある場合、その旨を記し、各記事の対照は、「鷲林拾葉鈔」の該当記事に対応させて記した。

一、「一乗拾玉抄」以下の諸本については、各々一つ書きに通し番号を付し、記述の順がわかるようにした。

一、人名の表記は、通称はそのままに、略称は適宜改めた。

一、書名の表記は、なるべく原文のままとし、「此経」など、文脈に照らして補う場合は「法華経」など、通用する略称を用いた。

一、和歌は、「鷲林拾葉鈔」では一首全部を掲載し、へ1へ2へ3として歌番号を付した。「一乗拾玉抄」以下は、対応する歌番号を示し、語句の異同を示した。

*この記事対照表の作成にあたり、記事対照の方法は、市古貞次編『平家物語研究事典』（明治書院・昭和五三年）所収、「平家物語諸本記事対照表」を参考にし、多くを依っている。

◆序品第一之一 (1)

項目	(1) 凡此法華經者
『鷲林拾葉鈔』	<p>A 『法華經』とは、三世の諸仏、出世の本懐、衆生成仏の直道である。</p> <p>B そこで釈尊は、法華經を説くために華嚴に擬宜し、般若に沙汰して四十余年種種の方便を設けた。根機純熟し感応道交の時に至り、靈鷲山で八年間この妙法を説いた。大事の因縁を遂げ、出世の嘉懐を</p>
『一乗拾玉抄』	<p>(1) 一、大意事</p> <p>A₁ 『法華經』とは、三世の諸仏の嘉會一切衆生成仏の自体である。</p> <p>B₁ 釈尊も出世成道して、一切衆生を引導して終に成仏させると誓う故、まず四味の教法を設け、第五時に至り法華を説く時、法を聞く者は、成仏しない者</p>
『鞞塵抄』	<p>* 和歌八首</p> <p>(1) 法華經^h</p> <p>A₂ 『法華經』は三世の諸仏の大事因縁、一切衆生成仏の指南である。</p> <p>f 四味の諸經も『法華經』の方便なので、『法華經』は諸經の王と定められた。</p> <p>g 三説の御教も純円の弄引なので、超八醍醐</p>
『法華經直談抄』	<p>(1) 凡此法華經申、</p> <p>A₃ 凡そ、この『法華經』と申すは、如来内証の奥蔵、究竟真實の法門である。</p> <p>r 難解難入の妙法であるので、言辭相寂滅して言を以てなるべからず、宣と説き、一論の中には、言を以て云わんとすれば虚空に丈尺を打つに似ている。筆</p>

<p>顕した。</p>	<p>C 成仏の直道とは、権教権門の心は、修行に時節を送り、成仏を儼劫の後に期す。故に紆廻の小経と名づけるのである。</p>	<p>D 『法華経』は一切衆生色心二法の当体を押し、妙法難思の境智と指示する。故に、妙法と聞くより外に修行を論じない。</p>	<p>E 一念に成仏するゆえに直道と云うのである。</p>
<p>はないと言っているのである</p>	<p>G、仍て先徳は成仏の難にあらざる事、この経に値うこと難きなりと口伝なされた。</p>	<p>a 【大論】 鉤を呑む魚は久しく海にとどまらず。さて法華の鉤を呑む人は、生死の大海に留まらないのである。</p>	<p>b 【恵心先徳】 鳩鳥、毒を吐けば魚を殺して久しからず、円乗果位に著すれば成仏近きにある。</p>
<p>の経とも云う。</p>	<p>B。仏の所説贊と云えども第五時の一乗の教を必ずその題を妙法蓮華経と唱えて出世の本懐を遂げるのである。</p>	<p>h 是則ち巧に同体権実を顕し、実相の因果を含むのである。</p>	<p>i 抑も、三世諸仏の十方の薩埵は何の故に出世の本懐と号し、大事の因縁とは崇むぞと云うに、於一仏分別説三と説くに四味三乗の教法は、元是れ一乘実相理より出る。</p>
<p>をとって書こうとすれば、大海に墨繩を引くのと同じようである。</p>	<p>s 言語道断の心形所滅の法門である。</p>	<p>t 蜀江の錦は染めるに随つて色を増し、合浦の玉は、研ぐに随つて光を増す道理なので、たとえ、愚かな凡夫でも『法華経』と聞いて深く信心を起し、眞文を開いて深く是を思惟すれば、妙法の義理は自然に現れ出てくるのである。</p>	<p>u 【梵網経解題】</p>

<p>F 【山家釈】曠劫多生の間、無量の行願を修して成仏を当来に期すのは權教權門の施設である。万徳円満の性を明かせば自身の本覚の理を談ずる。成仏一念に論ずるは法華円教の実説なり。</p>	<p>ると釈した。鳩という鳥は、毒を飲んでそれを水に嚙と呑んだ者は死ぬのである。妙法という毒水を服して三惑五重の煩惱を殺して成仏するのである。</p>	<p>j 草木不同であるので受潤異を成すが機宜一でなければ、裏教巻々に随う。</p> <p>k 故に、四十余年の古えは、教法の縁起する源を知らず。帰趣する処を求めて随他意と名づけ、帶方便の教を号する。今機純熟の時を迎え、序分の無量義經を説いて、三法四果權実半満を開出し、正宗の法華に至つて実相真如の一理に帰せしむ。</p> <p>l (諸經を子臣に例える。法華は父) 目連な</p>	<p>示すものがないのは、胸の内のことであるから、教える者がなければ、わかることもないのである。目の前の境界であつても見えないのである。</p> <p>v このように講談する、只、随力演説の分際也。</p>
<p>G 又云く、成仏は難にあらず、法華に値うことが難なのである。</p>	<p>c 釈尊出世の本懐と云う事は、薬師も淨瑠璃世界の浄土に出て、阿弥陀も一念十念の引導と云えども、西刹浄土に出なさる。浄土には利根の者、聖人のみ生まれるので度しやすい。この娑婆世界は五濁乱</p>	<p>如の法華に至つて実相真如の一理に帰せしむ。</p>	<p>w 天台宗の心は、文字の無い処に文字を立て、言句の無い処に言句を立て、法華の分義を沙汰するのである。</p> <p>x 天台宗で、天台六十卷というのは、法華經</p>
<p>H 【慈覚大師釈】徒に萬行を修し成仏を当来に期せんよりは一心三觀を修して即身に正覺を成ぜんには如かず。</p>	<p>此の娑婆世界は五濁乱</p>	<p>如の法華に至つて実相真如の一理に帰せしむ。</p>	<p>x 天台宗で、天台六十卷というのは、法華經</p>

<p>I 【法華經】一切菩薩阿耨菩提皆此の經に屬す。</p>	<p>J 四教八教の修行は不同だが成仏ということは必ず法華に帰すものである。</p>	<p>K 所詮、妙法は心性である。心に迷うを衆生といい、心を悟るを仏と稱するのである。だから心性の法体を悟るを以て妙法と名づけるのである。</p>	<p>L 故に、このように聞くより外に成仏は別にあるはずがない。よくよく意を得るべきである。</p>
<p>満で機も鈍で、煩惱の厚い故に度しがたい。</p>	<p>d 諸仏の悲願にも漏れ、十方の浄土にも捨てられる衆生を度しなざるを釈尊出世の本懐と言うのである。</p>	<p>e 法華は余經に勝れ、結縁の衆生を一国土に集めて釈迦は出世なさる故に、此土に生じてこの經を聞く者は、成仏疑いがないのである。</p>	
<p>どの声聞も、仏知見を開き、成仏の記を顕し、提婆・龍女などの悪逆も残り無く等正覺の別を受ける。出世本懐なのである。</p>	<p>m 一花開けば天下皆春になる。龍女の八相を以て声聞の成仏を知り、身子の受記を以て一切衆生の成仏を知る</p>	<p>n 仏心は大慈悲心である。たとえ一切衆生を成仏させても仏の本懐とするべし。十界悉く仏道に入ること、大事の因縁と言わないのか</p>	
<p>① 玄義は、法華の主題の五字を名体宗用教の五重玄義・七番共解で説いたものである。</p>	<p>② 文句は、「如是我聞」から「作礼而去」までを文々句々の本迹觀心の四種の釈で説いたものである。</p>	<p>③ 止観は、首題にも拘わらず、入文にもよらず、法華の大意を釈す。法華の大意であるかは議論がある。</p>	<p>y 法華經とは、輒く明じ難き物であるので、</p>

M 成仏は難にあらず、法華經
に値うを難とするのである。

(↓Gに同じ)

G2 先徳は、成仏の難
ではなく、『法華經』
に値うことが難なので
ある、と言った。

a1 鉤を吞む魚が久し
く淵を泳ぐことが無い
ようなものである。

o 実相の妙法を耳に触
れる程の者は、生死の
苦海に当ること無し。

p 釈尊の慈悲は甚だ切
である。(上願の医王)

q 他生他仏の結縁もた
だ釈尊の慈悲より起こ
る。一切世間父と云う
は悉く是吾子という金
言である。

天台妙楽の判釈を伺わ
ず、更に舌端に載せて、
文義は分別するのが難
しい事である。

x

<p>(2) 師子頰王に四人の王子あり。</p>	<p>(2) 和光同塵は結縁の始め、八相成道を以てその終りを論ず。</p>	<p>(2) 大意之事 (↓〔11〕へ)</p>
<p>a 一、淨飯王、二、白飯王、三、斛飯王、四、甘露王。釈尊は淨飯王の太子である。</p>	<p>a₁ (釈尊の出自・系譜) h 母は摩耶夫人</p>	<p>j 大意というのは、法華經とは、三世諸仏出世の本懐、一切衆生成仏の直道と定めている</p>
<p>b 七歳の時、内裏の四の菌に一人の老人が現じて、生老病死の四相を現じた。是を見て眞の出家をなした。</p>	<p>i 四月八日の中夜に誕生した。</p>	<p>k 諸仏出世の本懐とは方便品に、諸仏世尊唯以一大事因縁故出現於世と説く。</p>
<p>c 無常の世を捨てて修行覚道して三界の衆生を救いたいと願う。</p>	<p>l 穢土において八相成道した。一大事因縁の法華經を説くためである。</p>	<p>m 世間でも、須磨明石の浦に出る人は、月を</p>
<p>d 臣下は大王に太子に后を迎えることを奏上</p>		

した。

e 后は耶輸大臣の娘耶輸陀羅に決まった。提婆が不満を持つ。

f 提婆と、耶輸陀羅を奪い合う。競射で勝負、提婆は四枚、太子は七枚射抜いて、太子が勝つ。太子の弓は、金輪際まで徹った。耶輸陀羅が后に決まる

g 「一義」後に相撲でも勝負し、太子が勝った。鞠でも勝負した。提婆が四枚射抜いた、前四味の不満足の例え、太子の七枚悉く射抜いた

見るためである。嵯峨吉野の山奥に尋ね入る人は、花を詠む為である。

j₁ 法華経は如来出世の本懐と定めている。

(3) 釈尊一代事

「釈迦如来出世本懐」と云うに付けて、釈尊がこの経を説く為に苦勞したこと、釈迦の恩徳を述べる。

a₁ 師子脇王に四人の子あり。

h₁ 母は摩耶夫人

j₂ 夢に金色の白象が摩

<p style="text-align: center;">×</p>	
<p>a 太子十九歳の時、王城を出て且特山へ入</p> <p>(3) (太子出家・修行)</p>	<p>のは、法華の願満の類である。</p>
<p>f 十九歳の時、四門を出て四仏の事を見る。</p> <p>(2) 続き</p>	
<p>g_i f_i</p> <p>(3) 続き</p>	<p>f_i 一の美人である。</p> <p>k 耶輸陀羅は五天竺第一の美人である。</p> <p>e_i d_i った</p> <p>j 相人が、幼少の太子を大転輪王となると占</p> <p>i_i 四月八日に誕生した。東に七歩歩いて「天下唯我独尊」と唱えた。</p> <p>耶の胎内に入ると見え て懐妊した</p>

<p>e 仏は一代声聞の為に、五時の法論を転じ法華に至って己心の直</p>	<p>d 魔王が障碍をなす。問答の後、魔王は退散する。</p>	<p>c 菩提樹下にて等正覚をなした。</p>	<p>b 七里山奥に入る。大蛇にあう。難易の二行を十二年行う。</p>	<p>a 二人の共が帰らないので、我の正覚の時は一切衆生皆我が支となるので、今はただ帰るように、と説き伏せられて帰った。</p>	<p>生老病死を悲しむ。</p>
			<p>c 二月八日明星出時、等正覚を成した。</p>	<p>h 象頭山で修行</p>	<p>g 舍人車匿に命じ、健陟という馬に乗って城を出て檀特山に入る。(修行)</p>
			<p>j 鹿野苑へ</p>	<p>d 尼連禪河の辺</p>	<p>b 菜つみ水汲み薪こり十二年の間難行苦行した</p>
			<p>c 1 菩提樹下で説法をする。</p>	<p>i 三十歳の時、三界の業縛を断じた。</p>	

<p style="text-align: center;">×</p>	
<p style="text-align: center;">×</p>	<p style="text-align: center;">体を説顯するのである</p>
<p>a (華嚴時、阿含時、方等時、般若時、法華時と、五時に従つて説く)</p> <p>b 【私】余経は当機益物の教えで、如来の本意を説かない。法華経は、説教の元旨を明らかにする。四味の諸経は法華のための弄引なので、前の四味の説教を説かなければ法華経の</p>	<p>(3) 成道の始めに、寂滅道場に大菩薩のために舍那身を現じて円満教を説く。</p>
<p>c 今日に至つて法華経を説くのは、二乗を成仏させる為である。一切衆生を開悟させるためにこの今日を以て、如来出世の本懐、衆生成仏の直道と云うのである。</p> <p>(5) 羅什舌不焼之事 ↓ (5)</p>	<p>(3) 続き (阿含・方等・般若を説く)</p>

	<p>(2) 直談由来事</p> <p>一、法華講談由来事</p>
	<p>A 三国共に止む事なし</p> <p>B 先蹤の多い中で、陳の宣帝は天台大師を請い、清涼殿で法華經を講じさせた</p> <p>C 日域より、伝教大師は桓武天皇の勅を受け入唐した。修円・勅操などの二十七人と同じく行滿座主を請いて、法華經を講談させる。</p>
	<p>△</p> <p>B 1 ↓ (3) c、類話</p> <p>C 1 ↓ (3) d、類話</p>
<p>經旨も明らかにならな いのである。</p>	<p>×</p>
<p>(6) 調卷不同事 ↓ (8)</p> <p>(7) 薬師如来事 ↓ (8)</p> <p>(8) 三仏像造三塔安置事 ↓ (8)</p> <p>(9) 南閻浮提薬師浄土事 ↓ (9)</p> <p>(10) 三種法華事 ↓ (7)</p>	<p>(二) 直談由来事</p> <p>a 一国に亘って先蹤あり。</p> <p>b 天竺で大聖釈尊は、八箇年の間、御説法した。</p> <p>c 唐土で、羅什は秦の姚興皇帝に対して法華の品々を説じ給う。</p>

<p>(3) 直談訓読不同</p>	
<p>A 訓読とは、天台妙楽の釈義</p>	<p>D 本朝では、伝教大師は母の菩提のために、東坂本聖源寺で法華經の直談を行った。また父の三津百機<small>（ミヅヒヤクキ）</small>のため、戸津観音堂で法華經を講じた。二所の談義は今も退転しない</p> <p>E 嵯峨天皇の御宇、承和元年、弘法大師は東寺真言院で法華經を講じた。顯密一致の談義である</p> <p>F 東陽和尚は鳥羽院に対し法華經を講じた。</p> <p>G (静明法印は後) 嵯峨帝に法華經を講じた。その他先規は毛筆に違あらず。</p>
<p>(4) 一、直談ト云事</p>	
<p>×</p>	
<p>(二) 続き</p>	<p>B₁ 天台大師は、陳皇のために談じた。</p> <p>d 又、隋煬帝の為に講じた</p> <p>C₁</p> <p>D₁</p> <p>E₁</p> <p>F₁</p> <p>G₁</p>

<p>を本として、分段・科段を分かち、経論の証拠を引き、品品の来意・生起を乱さず、文文句句の志趣を委細に^{こま}理ることである</p>	<p>B 直談とは、タタチニコトハルと読むのである。</p>	<p>C 経論の説に携わらず、釈義の指南に滞らず、直に妙法の経旨を談するのである</p>	<p>D 是は即ち一句入心成観であるため、法華一部の始終、本迹両門の首尾、この法体を</p>
<p>C 天台・妙楽の釈にも依らず、余人師の判釈にも依らず、余経の法体を直に顯すことを直談と云うのである。</p>	<p>B 直談の二字をば「スグニコトハル」と読むのである。</p>	<p>a 【心毫仰】一家の意は天台・妙楽の釈をも用い、余人師の釈をも假るのが直談である。</p>	<p>b その故は、心外に法を置かざる故に大師も己心の大師、余宗も心内の他宗である。仍て釈尊・阿難も天台・妙</p>
<p>B 直ニコトハルと読むのである</p>	<p>f 法華の妙理は難解難入で知りたい。</p>	<p>g 諸宗の大師は多くの釈義を設けた。中にも天台は玄義・文句・止観など多くの釈義を設けた</p>	<p>h 章疏を開いて明らかにしようとする、広伝にして輒く明らかにしたい。そこで釈義の才覚を聞いて、直に法華經に向かい、即身成仏の旨をコトハル故に直談と云うのである</p>

行者一念の心性とコトハル義である

E【記三】法華一部方寸知るべし。これを思うべし

楽も我が心中と無二の所に安処して、訓読すべきなり。だからもし人が来て疑いを起こしても、無始の無明が障りをなすと意を得て耳を押さえて聞くべからず、目を塞いで見るべからず、ただ自他不二の法華の体と達するべきである。

c 異朝では、陳の国王が智者を請いて『法華經』を講読し、得益の人が多かった。

d 本朝では、桓武天皇が山家の大師を請い、

る。

i【一義】当世の誦誦と
いうことは、声に読むのである。釈尊の靈鷲山の御説法は訓読である。故に、直談と云うのは、如來說法のままにて直談と云うのである。

j 所詮法華經というのは、三世常住にして經王である。

k 生仏は本来不二であるが、仏とも衆生も一仏性で隔てなく、三世はまた一念なので、全く今昔同じである。仍

謁して清涼殿で本分の
観心を講じさせた。

e それ以来、和漢に伝
来して門流に相承する
のである。

て濁世末代の今も高座
に登り妙経を唱える師
は即釈尊と号す。この
説法を聞く人は、即釈
迦の十大弟子であり、
即法華の同聞衆であ
る。二経の所在は皆常
寂光なので、即その道
場である靈鷲山と心得
て、その心を持てば、
靈山一会巖然未散なれ
ば、その功德も如来在
世の昔と同じである。
また功德の多少は信心
の厚薄によるのである